慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ニュー・ヨークからアイオワへ(上) : ある農民の西部移住
Sub Title	From New York to Iowa : the experience of a westward migrant
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.7 (1974. 7) ,p.591(1)- 611(21)
JaLC DOI	10.14991/001.19740701-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19740701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニュー・ヨークからアイオワへ（上）

——ある農民の西部移住——

岡　田　泰　男

はじめに

ベンジャミン・ギュー (Benjamin F. Gue) は1828年，ニュー・ヨーク州グリーン郡 (Greene County) に生れた。1833年，両親は同州オンタリオ郡 (Ontario County) に移住したが，父のジョン (John) は，ベンジャミンが10歳のときに世を去ってしまった。ベンジャミンには一つ年上の姉がいたが，彼が長男であったので，早くから母親を助けて農場の仕事をしなければならなかったに違いない。もっとも少年時代のベンジャミンについては，あまりわからないのであって，われわれが彼の日常生活について良く知ることができるのは，彼が日記をつけ始めた1847年以降のことである。その年，彼は18歳であったが，すでに一人前の立派な農民として，父の残した農場を経営していた。農場はファーミントン (Farmington) の近くにあり，このあたり一帯は豊かな土地として有名なジェネシイ地方 (Genesee Country) であったから，ベンジャミン達の暮しは，それほど苦しいものではなかった。冬の間は約3ヵ月，寄宿舎に入って学校に通い，近くの町で例のフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) の奴隷制反対演説や，ルクレシア・モット (Lucretia Mott) の女性解放の主張を聞くこともあったし，いろいろな社交機会もあった。(1)

しかし，当時の若者にとって，東部の農村での生活は，そこに一生腰を落着けていようとするほど魅力的なものではなかった。1848年にはカリフォルニアでの金発見の話が伝わってきたし，都会生活へのあこがれもあった。ベンジャミンの姉サラ・アン (Sarah Ann) は同48年の夏にニュー・ヨーク市に住むジェイムズ・メイコウマー (James Macomber) と結婚したが，そうしたこともきっかけになったのか，1849年1月1日のベンジャミンの日記には「今年中には，われわれの農場を売るかどうかを決める」という記入がなされている。もっとも，その年はそのままに過ぎ，翌50年の春に

注(1)　ここで利用するのは，*Diary of Benjamin F. Gue in Rural New York and Pioneer Iowa, 1847-1856*, ed. Earle D. Ross (Ames, Iowa, 1962) である。なお，本稿はもっぱらこの日記に基いているので，特に必要な場合以外は，日記についての註記は付さない。また，註記する場合には，単に *Diary* と記す。

なってから，ベンジャミンは数名の友人とカリフォルニアへ行く決心をする。そして，ニュー・ヨーク市までは行ったのであるが，船の予約が一杯で何カ月か先まで待たねばならぬことを知る。かくして最初の冒険は，ニュー・ヨーク見物と，ホレイス・グリーリイ（Horace Greeley）を雑貨屋の店先で見かけたという収穫のみに終ってしまった。けれども，広い世界へ出てゆこうという彼の決心は変らなかった。

1851年8月，ベンジャミンはオンタリオ郡の農場を売却する。母と弟妹たちは，ひとまずグリーン郡の親類のところに住むこととし，ベンジャミンは姉の夫ジェイムズを頼ってニュー・ヨーク市へ出る。彼の希望はそこで職につき，あるいは弁護士の見習いになることであったが，ことはそう思い通りには運ばなかった。ジェイムズは実業界に知人がなく，ベンジャミンは結局，新聞の求人欄で職探しをする羽目におちいる。そして，「パノラマ・エキジビションの弁士」の口にまで応募してみるのであるが，とうとうニュー・ヨーク市での就職はあきらめねばならなかった。彼は母親や多くの親類のいるグリーン郡へ戻り，そこで農場を購入することも考えるが，決心がつかなかった。遊んでいるわけにもゆかないので，冬の間は学校の教師の職を得るが，次第に西部へ移住しようとする気持が強くなる。これは，3歳年下の弟ジョー（Jo, Joseph）が，イリノイへ出かけていたことにもよるのであろう。1852年1月1日の日記では，ニュー・ヨーク市で味わった失望を回顧して，「都会で生活しようという気持がすっかりなくなった」ことを書いている。

1852年2月2日，ベンジャミンはアイオワへ向けて出発する。弟のジョーは，前年に友人とイリノイへ行き，農場で働くつもりであったのがうまくゆかず，セント・ルイスに一時滞在した後，冬の間はシンシナチまで戻ってきていた。兄弟は2月23日に，オハイオ州のベルヴュウ（Bellevue）という町で落ち合い，シカゴを経て，3月2日にロック・アイランド（Rock Island）へ着いた。ミシシッピ河は，まだ氷結していたので，翌日2人は，例のカーペット・バッグに身の回り品をつめ，氷の上をすべったり，ころんだりしながら歩いて渡った。ところが，アイオワ側の岸へ着いて，ホッと一息ついていると，遠雷が近づくような不気味な音がし，「氷が動いている」と人が叫ぶのが聞えた。「ほんの15分ほど前に渡ってきた氷が，大きなかたまりとなって，すさまじい音をたてながら流れてゆくのを見て，私は自分の目を信じられなかった」とベンジャミンは記している。

かくしてアイオワへ到着したベンジャミンとジョーの兄弟は，約2週間にわたって，農場や土地を見てまわり，結局スコット郡スプリング・ロック・クリーク（Spring Rock Creek, Scott County）に，すでに開墾され，小屋や柵もつくられている農場を取得する。1853年には，さらに連邦政府の公有地を取得し，同年10月には母親や弟妹達をニュー・ヨーク州から呼び寄せて，再び一家水入らずの生活を楽しむことができるようになった。もっとも，1855年になると，弟のジョーが6月に結婚し，すでに取得してあったシーダー郡（Cedar County）の土地に移る。ベンジャミンには，オンタリオ郡に住んでいる頃，将来を約束しあったディリア（Delia）という女性がいたのであるが，去る者は日々

に疎し，結局アイオワに来てから知りあった愛称リブ，エリザベス・パーカー（Lib, Elizabeth Parker）と同年11月に結婚する。そして，母と妹，まだ学校へ通っている弟は，また東部へ戻って暮すことになる。ベンジャミンの日記も，1855年末をもって終っている。

1847年から1855年末まで，計9年間にわたるベンジャミン・ギューの日記は，単に当時の農業や農村生活について知らせてくれる点で貴重であるのみならず，西漸運動が個々の農民にとってどんな意味をもったかを教えてくれる極めて稀な史料である。西部への移住がいかにおこなわれたかについては，さまざまな記録が残っているし，東部と西部との農業の相違については，旅行記などからも知ることができる。しかし，同一の農民が，東部で暮していた時代と，西部へ移住した後の時代にわたって，10年近くも農場での生活を記録していたという例は，ほとんど見当らない。いわば西漸運動の生きた具体例を提供してくれる点で，この日記は高い価値を有しているといえよう。もちろん，ニュー・ヨークからアイオワへ，というような長距離の移住は必ずしも通例であったわけではなく，この点はベンジャミンが独身の若者であったことにも関係があろう。ただ，長距離の移住であったおかげで，当時の東部と西部における農業の違いが，より鮮明に写し出されているという利点がある。とくに，プレーリーという東部農民にとっては全く新しい環境の下で，農作業や農場経営がいかに変化していったかを示す点で興味深い。以下，東部と西部における農場・土地売買，農業生産および農業労働の変化，農場経営における相違という順に述べることにしよう。(2)

I　西部移住と農場売買

まず最初に19世紀中葉の東部と西部における農場・土地の市場の状態について考えておきたい。ごく一般的にいえば，西部農業の競争，西漸運動の進行，都市化の進展という状況の下で，東部農業は斜陽気味であった。酪農業や近郊農業などの特殊部門を除き，東部の農民は，所得低落，人口流出，労働力不足という事態に直面し，地価上昇の見込みはなかったといえる。したがって，東部においては農場・土地は買手市場の様相を示していた筈である。一方，西部農業は発展途上にあり，人口増加，地価上昇の見込みも大きかった。しかし，西部においては，連邦政府が広大な公有地を低価格で処分していたから，農場・土地に関して売手市場というわけにはゆかなかった。結局，東部西部を問わず，土地については供給が需要を上廻っていたと見ることができよう。

注(2)　筆者は先に，別のニュー・ヨーク農民の日記を利用して，「一農民の日記より見たるニュー・ヨーク農業の変遷」（『三田学会雑誌』64巻8号）および，「ニュー・ヨーク農民の日記，1850年」（『三田学会雑誌』65巻6号）を発表した。なお，以下を参照されたい。David C. Smith, "Middle Range Farming in the Civil War Era: Life on a Farm in Seneca County, 1862-1866," *New York History*, XLVIII (1967), 352-369; Yasuo Okada, "Squires' Diary: New York Agriculture in Transition, 1840-1860," *New York History*, LII (1971), 396-422; Paul W. Gates, "Problems of Agricultural History, 1790-1840," *Agricultural History*, XLVI (1972), 33-58.

もっとも，東部と西部とを比較すると，将来性においては後者が勝っていたとしても，19世紀中葉における地価は，東部の方がはるかに高い。これは，交通の便，生産物販売の機会，教会や学校の有無などを考慮すれば当然のことであろう。西漸運動に参加した東部農民の多くは，かかる地域間価格差を利用して，経営を拡大することを望んだのである。ところで，価格差のみに注目すれば，移住の距離は長いほど良いことになる。フロンティアに近づけば近づくほど，公有地も多く，地価は低い筈だからである。しかし，それに並行して交通機関等の社会的経済的条件は悪化するので，必ずしも長距離移住が有利とはいえない。しかも，開拓の先端が森林地帯を過ぎてプレーリーに達しているとなれば，木材や水の不足が予想される。地域間の価格差を利用できると同時に，生活環境に急激な変化が生じないという条件を充たすのが，いわば最適移住距離ということになるが，両者のかねあいをとるのは，なかなか難しかったに違いない。ニュー・ヨークからアイオワへという移住は，その意味で，かなり大胆な行動であった。(3)

さて，東部における農場・土地市場が基本的には買手市場であったとしても，個別的には農場のある地域や，農場の整備状態等によって千差万別であった。ベンジャミン・ギューの東部における農場売却の経過を見るにあたり，まず地域的環境を調べておく必要があろう。すでに述べたように，ギュー農場はニュー・ヨーク州西部の豊かな地域にあり，交通機関や農産物販売の機会にも恵まれていた。オンタリオ郡は，もともとフェルプスとゴーラムがマサチューセッツ州政府から購入した区域（Phelps-Gorham Purchase）に含まれていた。カナンダイガ（Canandaigua）という町は，ベンジャミンが，しばしば日帰りで農産物を売りにゆくところであったが，この町は1789年にフェルプスが土地売却事務所をおいた場所でもあった。1808年にはセネカ・ターンパイク（Seneca Turnpike）が，カナンダイガにまで達し，同年この町は，ニュー・ヨーク州内部では，ユティカ（Utica）以西における最大の町といわれた。有料道路の時代は急速に運河や鉄道にとってかわられたが，1840年には鉄道もカナンダイガを通るようになった。もちろん40年代後半ともなれば，ニュー・ヨーク州西部といえども，オハイオ州以西の本来の「西部」との競争や，病虫害等による小麦収穫量減少に悩まされるに至った時期であるが，まだまだこの地域の農業は繁栄を続けていた。したがって，ベンジャミンの農場は，東部全体の中では比較的恵まれた地域にあり，売買に際しての売手の立場はそれ程不利ではなかったと思われる。(4)

ベンジャミンが農場売却の意志を日記に書きつけたのは，前述の通り，1849年1月1日であった。しかし，ギュー農場の購入希望者は，それ以前から現われており，前年の秋にはカーペンター（Mr. Isaac Carpenter）という人物が二度ほど訪れているし，他にも同様な訪問者があった。1849年2月に

注(3) 東部および西部における農場価格については，次を見よ。Thomas J. Pressly and William H. Scofield, ed. *Farm Real Estate Values in the United States by Counties, 1850-1959* (Seattle, 1965).

(4) この地域については，Neil A. McNall, *An Agricultural History of the Genesee Valley, 1790-1860* (Philadelphia, 1952).

も，近くのパルマイラ（Palmyra）から，農場購入の下見に来た者がある。ベンジャミンが，結局1851年8月になるまで農場を手放さなかったのは，買手がいなかったからではなく，むしろ購入希望者は何時でもいたので，安い価格で売り急ぐ必要がなかったためと考えるべきであろう。農場が気に入ったカーペンターの申し出た買値はエーカーあたり30ドルであったが，ベンジャミンが1851年に売却したときの価格はエーカーあたり40ドルであった。もっとも農場売買の交渉に，そう長時間かかるわけではなかった。51年8月2日にベンジャミンの農場を購入したアプトン（Mr. Upton）は，前日の午後，はじめて農場を訪れたばかりであった。ベンジャミン達は「大変喜んだ」とあるから，40ドルという価格は，予期していたよりも高いものであったのかもしれない。

なお，当時のこの地域の土地市場は，農場単位の売買のみから成り立っていたわけではない。農地の賃貸借，それも農場全体ではなく一部分の貸借や，ほんの数エーカーの林地の売買もおこなわれていた。畑に比較すると林地の価格は低く，49年12月28日にエーカーあたり15ドル50セントで売買という記入がある。この点は，林地の方が尊重され価格も高いアイオワなどの草原地帯とは良い対照である。林地の売買は，しばしば土地ではなく立木を目的としたものであり，ベンジャミンの場合，もう一人の仲間と共同で林地3エーカーを分けてもらい，冬場に伐採して，材木を売るのである（1849年11月25—26日の項）。

以上の如き事態は，東部における土地市場の多様性を示しており，一概に買手市場とはいえぬことを物語っている。しかしながら，東部農民の多くが，買手さえあれば農場を売却して西部へ行くなり，都会へ出るなりしようとしていたらしいことは，ベンジャミンの経験からも裏付けられる。農場売却後，ニュー・ヨーク市へ出たベンジャミンが，職探しに失敗して，いったん，母親達のいるグリーン郡へ戻ったことはすでに述べた。グリーン郡は両親の出身地であり，両親が以前に所有していた農場が存在した。ベンジャミンは，ある日，自分が5歳まで育ったこの農場を訪れたが，現在の所有者は，その場でベンジャミンに対して農場売却を申し出ている。(5)

ちょうどこの当時アメリカを訪れていたイギリスの農学者ジェイムズ・ジョンストン（James F. W. Johnston）は，「ニュー・イングランドやニュー・ヨークには，いまだ郷土愛というようなものは，ほとんど存在しない」と述べ，さらに「メイン州のイーストポート（Eastport）からエリー湖畔のバッファロー（Buffalo）にいたる間のすべての農場は，売りに出されているといっても良い。持主は，いくらでなら売っても良い，あるいはいくらで売りたいという値段を，すでに胸の内で決めていて，それだけのお金があれば，西部へ行って，もっと豊かな暮しができると考えている」と記している。(6) ベンジャミンは別の機会にも農場購入をすすめられているが（1852年1月3日），彼のグリーン

注(5) *Diary*, Oct. 24, 1851. 農場は164エーカー，現在の所有者モーセス・カーマン（Moses Carman）の申し出た価格は，エーカーあたり36ドル50セントであった。

(6) Paul W. Gates, *The Farmer's Age: Agriculture, 1815-1860* (New York, 1960), p. 400 に引用されている。

郡での経験は，この炯眼なイギリス人旅行者の観察を裏付けているともいえよう。もっとも西部へ行くといっても，当時ニュー・ヨーク州内の東部と西部とでは，農場価格あるいは地価はほとんど差がなく，むしろ西部の方が高いくらいであった。したがって，地域間の価格差を利用して暮し向きを良くしようとするならば，オハイオなり，イリノイなりまで行く必要があったであろう。

次に，西部における農場・土地市場の状態を，ベンジャミンのアイオワでの経験を通じて見てみよう。彼がアイオワへ移住することを決定した理由は，弟のジョーがすでにイリノイまで行っていることによるものと思われる。ジョーはオンタリオ郡の農場売却後，友人と共に羊の群を追ってイリノイに行き，そこの農場で働く計画はうまくゆかなかったものの，西部の様子をいろいろ兄へ伝えていた。1851年11月にベンジャミンが受取った手紙によると，ジョーはモウリーン (Moline) の製粉工場で月給22ドルで働いていたが，モウリーンはイリノイ西端の町であり，ミシシッピ河を越えればアイオワである。ベンジャミンは同年12月25日の日記に「来年のクリスマスは，ここから何百マイルも離れた西部のアイオワかイリノイ」と記している。東部の農場を売却して移住資金をつくり，目的地を決定すれば，いよいよ出発である。途中シカゴでナイフ，磁石，移住案内書などを購入しているが，アイオワへの旅行は，とくに困難なわけではない。この2年後には，鉄道もアイオワまで開通するのであって，西部への移住の旅そのものは，ミシシッピ渡河を除き冒険というほどのこともなかった。むしろ問題は移住後の土地もしくは農場の取得にあった。

アイオワへ到着した兄弟は，まず「土地事務所」(Land Office) へ行ったと日記にある。この "Land Office" という名称は，連邦政府の地方土地局を示すから，彼等が公有地を取得するため土地局を訪れたものと解釈したくなる。しかし，彼等はロック・アイランドからミシシッピ河を越えており，その地点にあるダヴェンポート (Davenport) には，当時，政府の土地局は存在しなかった。1852年3月現在，アイオワの土地局はダヴューク (Dubuque)，フェアフィールド (Fairfield)，アイオワ・シティー (Iowa City) の3ヵ所にしか設置されていなかったのである。[(7)] ダヴュークはもっと北側であり，他の2ヵ所は内陸へ入った場所であって，ミシシッピ河沿いではない。したがって，アイオワ側へ渡った兄弟が最初に訪れたのは，連邦政府の土地局ではなく，不動産業者の事務所であったと思われる。ダヴェンポートでは，1847年から，クック・サージェント不動産(Cook and Sargent, General Land Agents)が店を開いており，ベンジャミンは結局この業者を仲介にした形で農場を購入しているので，「土地事務所」とはクック・サージェント不動産と考えてよかろう。ここで兄弟は「いくつかの土地についてノートをとって」から内陸へ向うのである。[(8)]

西部への移住者にとって，公有地を取得して開墾することは第一に考えるべき方法であるが，他

注(7) アイオワの連邦政府地方土地局所在地は，次に記されている。Roscoe L. Lokken, *Iowa Public Land Disposal* (Iowa City, 1942), p. 287.

(8) クック・サージェント不動産については，Robert P. Swierenga, *Pioneers and Profits: Land Speculation on the Iowa Frontier* (Ames, Iowa, 1968), pp. 107–110.

にも方法はある。とくに移住者が十分に資金を持っている場合には，すでに開墾されている農場を購入することも可能である。また，その中間として，公有地の一部を開墾して先買権を確保している居住者から，その権利を買いとるという方法もある。もちろん法的には先買権の売買は認められていないので，一応，開墾費の補償という形で代金を支払い，先買権を放棄してもらった上で，新たに公有地取得の手続きをすることになる。

これらの方法のうち，連邦政府から直接に公有地を取得する方法が最も安上りであることはいうまでもない。しかし，希望する場所で常に公有地が取得できるわけではない。ベンジャミンが農場を取得したスコット郡の場合，すでに1837年に測量がなされ，数年後には売却が開始されていた。この郡の面積は約290,000エーカーであるが，1850年には，すでに約140,000エーカーが私有化され，土地投機の盛んであった50年代中葉には，ほとんどすべての公有地が私有化されてしまった。したがって，1852年に到着したベンジャミンの場合には，まだ公有地は残っているものの，必ずしも自由に選択ができたわけではない。たとえ未墾の土地であっても，もはや投機的所有者の手に握られていたかもしれない。[(9)]

しかも，東部から移住してきた農民にとって，公有地であれ私有地であれ，まったく未墾のプレーリーの土地を取得することは，常に有利であるとは云いきれなかった。プレーリーの開墾が森林の場合よりも容易であることは当然である。しかしながら，プレーリーの芝土を最初にすき起すためには，特別の重い犂と何頭もの役畜が必要であり，この作業を専門に請負う業者が存在した。1850年代に関していえば，このような業者に依頼した場合，費用はエーカーあたり2ドルから5ドル，開墾の速度は一日あたり約2エーカーであったといわれる。[(10)] さらに，開墾した年にも作物は植付けられるものの，本格的な農業生産は次年度にならなければ開始できなかった。以上の如き場合に比べ，最初から開墾してある農場を購入すれば，すぐに農業生産をおこない得る。ベンジャミンのように春先きに移住して来れば，その秋には収穫が期待できるわけである。したがって，「未墾地を買って開墾するよりは，すでに開墾ずみの農場を買う方が安上りである」という農業雑誌の意見もあった。[(11)]

ところで，このようにさまざまな可能性があり，それぞれ一長一短であるとすれば，移住者としては慎重に考慮せざるを得ない。その際，いかなる方法で情報を集めるべきであろうか。もし公有地取得のみを目指しているならば連邦政府の地方土地局へ行かねばならないが，他の手段をも考えるとすれば，クック・サージェント不動産の如き業者のところの方が便利である。不動産業者は農

注(9) アイオワにおける公有地処分については，Lokken, *Iowa Public Land Disposal* および Swierenga, *Pioneers and Profits* を参照すること。

(10) プレーリーの開墾については，Allan G. Bogue, *From Prairie to Corn Belt: Farming on the Illinois and Iowa Prairies in the Nineteenth Century* (Chicago and London, 1963), pp. 70–72 および Clarence H. Danhof, *Change in Agriculture: The Northern United States, 1820–1870* (Cambridge, Mass., 1969), p. 123.

(11) *Iowa Farmer*, I (1853), 192–193. これは Danhof, *Change in Agriculture*, p. 128 に引用されている。

場や未墾の私有地のみならず，公有地についても十分に情報を持っており，取得手続きを代行してくれたからである。さらに，多くの不動産業者は銀行業務を兼ねておこなっていたが，金融制度の不統一な当時においては，この面でも彼等の世話になる必要があった。東部の銀行券や手形は，必ずしも西部で受取ってもらえるとは限らなかったからである。公有地取得の場合でも，地方土地局は，それぞれ何種類かの銀行券を指定し，それ以外は受取らなかった。これを一般に "Land Office Money" と称したが，例えばアイオワで最初に開局したバーリントン土地局 (Burlington) の場合，ミズーリ銀行 (Bank of Missouri)，イリノイ銀行 (State Bank of Illinois)，ウィスコンシンのミネラル・ポイント銀行 (Bank of Mineral Point) の額面20ドル以上の銀行券のみを受入れた。また，1853年に開局したケインズヴィル土地局 (Kanesville, 後に Council Bluffs) の如く，正金のみしか受入れぬこともあった。(12)

したがって，西部における農場もしくは土地の取得にあたっては，不動産業者が大きな役割を果すことになる。東部にも不動産業者は存在した筈であるが，ベンジャミンの日記では，ニュー・ヨークでの農場売買に際して業者の手を借りた様子はない。かかる相違は，結局は東部と西部における土地市場の状態の差によるところが多いと思われる。東部においては売買の対象は，とりあえず個人の所有する農場と考えてよいが，西部にあっては公有地と私有地が混在し，開墾済みの土地も未墾地もあるし，所有者が不在の場合も多い。かかる複雑さは，具体的には地価の巾がきわめて大きいという事態としてあらわれる。東部における地価が均一であるというわけではないが，同一地域の同程度の農場であれば，一応の相場が存在する。西部では，同一地域内にあっても土地の種類によって価格は著るしく異なり，新来の移住者が短期間にいくつかの物件を見ただけでは，到底，相場などはつかめない。さらに，東部からの農民にとって，西部の土壌等の判断は困難であり，価格が適正か否かは解りにくい。かくして移住者にとっては，不動産業者に頼ることが必要であり，かつ経済的でもあったといえよう。

さて，クック・サージェント不動産で，ある程度の知識を得た兄弟は，3月4，5の2日間「プレーリーで一日中適当な土地を探した」とある。これは公有地の見分のことと思われる。3月6日には「ウェルズ (Wells) と，彼の所有する160エーカーの土地を見に」いった。160エーカーのうち，ほぼ10エーカー分の林地があったと記されているが，すでにこの当時のアイオワ東部では，草原地はともかく，林地は大部分が私有化されてしまっていたに違いない。翌3月7日には，ポーター (Porter) という農民の所有する農場を見分しているが，この農場は200エーカーのうち40エーカーが林地で，75エーカーが開墾済み，柵や小屋も建てられていて，価格は800ドルであった。さらに3月8日にはパー (Parr) という開拓民が先買権を所有する土地 (claim) を見ている。160エーカーのうち25エーカーが開墾されており，柵や丸太小屋もあって，最初の云い値は250ドルであ

注(12) Lokken, *Iowa Public Land Disposal*, pp. 100, 115.

った。ベンジャミン達は一応この土地が気に入った模様であるが，パーの方でも，兄弟が立ち去る際には，150ドルまで値引きすると申し出ている。すでに述べた如く，先買権の売買は違法であって，一応，開墾費の補償ということになるが，かかる場合の代金は，後年，事情通のセス・ハンフリイ (Seth Humphrey) が述べている如く，当事者双方の必要度に応じて「長靴一足から数百ドルまで」という具合であったから，100ドルの値下げでも十分あり得る話であった。(13)

未開拓の公有地から整備された農場までを見たベンジャミンとジョーは，もっと良い土地があるかもしれない，というわけで更に西へ向い，ティプトン (Tipton)，ロチェスター (Rochester) を経て，当時の州都アイオワ・シティーに着いた。3月13日のことである。すでに記した如く，ここには連邦政府の地方土地局があった。兄弟は，アイオワ・シティー近辺の土地や農場を物色したが，必ずしも気に入ったものは見付からなかった様子である。結局2人は振出しに戻り，ポーターの農場か，パーの土地を購入することとし，3月16日に再度，交渉を試みた。ところが今度はパーは売却をあきらめたといい，ポーターの方は最初の値段800ドルを700ドルに下げても良いといったので，決断は容易であった。ベンジャミン達は3月17日に，ポーターの農場を700ドルで購入することに決めた。

ポーターの農場は，前記の通り200エーカーであるから，エーカーあたりの価格は3ドル50セントということになる。林地を40エーカー含み，そのままで生産を開始できる状態であったから，当時のアイオワとすれば，最も良い条件をそなえていたといえるし，少なくともベンジャミン達が2週間かかって探したうちでは最上の物件であった。しかし，この価格は，ベンジャミンが東部で売却した，オンタリオ郡の農場価格エーカーあたり40ドルに比べ，10分の1以下にすぎない。たとえ移住費や不動産業者への手数料などを差引いたとしても，ベンジャミンにとって，西部移住による利益は非常に大きかったといえよう。もっとも，かかる利益を得るためには，前述した西部土地市場の複雑さに惑わされず，十分な時間をかけて適正な判断を下す必要があったわけである。

東部と西部との地価の差の原因として，先には交通の便や，農産物販売機会等をあげたが，さらに，東部と西部とでは地価の性質も異なることを指摘する必要があろう。東部における農場・土地価格は，最終的には，その農場から得られる所得の大小によって支配される。特別の場合を除いて，地価が急上昇するような見込のある場所はないから，投機的要素が含まれることも少なく，豊かな土地の良く整備された農場の価格が高いという至極当然の結果が生ずる。一口にいって，東部における地価は純粋に経済的なものといえよう。

一方，西部における地価には，経済的とのみいえないような要素が混入している。第一に考えられるのは投機的要素であって，例えば西部の町もしくは町の計画がある場所が，法外な価格で売買されるのは，このためである。ところで，投機的要素が地価を本来あるべき水準より引き上げてい

注(13) Seth K. Humphrey, *Following the Prairie Frontier* (Minneapolis, 1931), p. 84.

るとすれば，公有地の存在は通常その逆に働く。19世紀中葉における公有地価格は，エーカーあたり1ドル25セントであって，これは所在地，肥沃度，立木の有無などとは無関係である。もちろん，公有地は最初競売されるのであり，上記の価格は本来，最低価格の筈である。しかし，特別の投機熱が存在する場合を除き，ほとんどの公有地は最低価格で払い下げられた。したがって，フロンティアに近く，まだ公有地が残っている地域においては，いかに恵まれた条件を有する私有地であっても，その価格は公有地に引っ張られて，それほど上昇できない。すなわち，西部においては，本来の経済的価値よりも低い水準に抑えられているような農場・土地価格が存在し得る。

かかる事情があるので，いったん，ある地域の公有地がなくなってしまうと，その付近の地価は急上昇するという現象が見られるのである。その地域の公有地がなくなるというのは，より具体的には，連邦政府の土地局が閉鎖されるなり，より西方へ移ってしまうという事態で示される。いわば，それまでが，その地域における土地の買い時であって，不動産業者の本来の活動期間といえよう。地方土地局のある町に不動産業者が多く開業していることは，その意味から象徴的であるといえる。地価が純粋に経済的な性質を帯びるようになった場所では，彼等の活動範囲は縮小され，利益も減少してしまうのである。もちろん，公有地が消滅したからといって，その影響がすぐになくなってしまうわけではない。地価の急上昇といっても限度はあり，西部の地価は割安であり続けるのである。

さて，西部の土地が割安である以上，必要以上に取得する，あるいは借金をしてでも買っておくという行動がとられるのは当然であろう。ベンジャミン達は翌1853年には，シーダー郡において公有地を取得しているが，この時の事情について述べよう。この土地には，やがて弟のジョーが住むことになるし，面積も合計200エーカーであるから，必ずしも投機的取得とはいえない。また，1853年には，すでに前年の作物を売却して収入を得ていたので，彼等の生活の基礎は一応固まっており，いわば安全で堅実な行き方であった。兄弟は3月に公有地取得の下見に出かけ，5月末にシーダー郡で160エーカーを取得する（あと40エーカーは後の機会に取得されている）。ここは兄弟の農場のあるスコット郡の西隣りにあり，ティプトンやロチェスターのある郡なので，前年の探索範囲に含まれている。但し，彼等はアイオワ・シティーの地方土地局へは行かず，例のクック・サージェント不動産で，160エーカーを“on time”で取得し，同年末期限の240ドルの手形で支払った。

不動産業者が公有地の取得手続きを代行することは先にも記した通りで，格別不思議はない。問題は“on time”という表現と，240ドルという価格である。公有地はエーカーあたり1ドル25セントであるから，160エーカーでは200ドルの筈であるし，当時は年賦売却制はとられていない。したがって，ベンジャミンのしたことは，その時に即金で200ドルが支払えなかったため，クック・サージェントから借金をし，40ドルは利息分として支払うというわけである。ただ，当時のアイオワにおける法定最高利率は年10パーセントであるので，半年で20パーセントは明らかに違法である。それ故，実質的にはベンジャミンが高利の借金をして公有地を取得したのであるが，形式的には法網を巧みにくぐる手段が講じられた。

すなわち，シーダー郡の160エーカーは，とりあえずクック・サージェント名義で取得される。但し，この業者はベンジャミンに対し，上記の土地を半年後に240ドルで売却するという契約を結び，ベンジャミンの側では同額の手形を渡しておく。したがって，形式的には，クック・サージェントが200ドルで取得した土地を，半年後にベンジャミンが240ドルで買うことになり，高利禁止法の対象にはならないのである。かかる期限付立替購入は，当時きわめて頻繁におこなわれており，“Time-entry”と呼ばれた。もっとも，ベンジャミンが日記の中で，“on time”という個所に，わざわざクォーテーション・マークをつけているのは，これが非合法とはいわぬまでも，特殊な手段であることを承知していたためであろう。(14)

西部の農民が高利の借金をしてでも土地を取得するという事態は，西部の地価が割安であるという理由によるが，それは同時に，現金不足という事情の反映でもあった。当時，農村の食料品店や雑貨店で，掛売りや物々交換がおこなわれていたことは，良く知られている。農場・土地売買となれば，かなり大きな額となるから，それだけの現金を用意するのは困難なことが多かったに違いない。公有地の場合には，前記の如く，正金または指定銀行券で全額を納入する必要があり，立替購入という方法も生れたわけであるが，私有地の場合はどうであったろうか。本節の最後に，農場・土地の売買にあたり，取引が現金でなされたか否かという問題を考慮しよう。まず，東部の場合から見てみよう。

ニュー・ヨーク時代のベンジャミンの日記を見ると，当時の東部農村においては，農民の間でも，かなりな程度，手形の流通がおこなわれていたことがわかる。彼の日記には，単に手形で支払うというだけでなく，誰々に対して「ダーウィンの手形（Darwins note）で40ドル支払った」（1849年10月28日）とか，「クラークの手形（Clarks note）で50ドル支払った」（同年11月15日）とかいう類の記入がある。農村経済において，信用がこの程度に展開を示していた以上，農場売買にあたっても，現金取引ではなく，信用授受がおこなわれるのは当然であった。その場合，代金の一部分は現金，残りは後払いとし，残金支払保証のため，買手は購入した農場を旧所有者たる売手に抵当に入れるという方法がとられた。残念ながら，ベンジャミンがオンタリオ郡で売却した農場に関して，総額や現金払い部分の割合などは解らない。日記から知り得るのは，エーカーあたりの価格と，売却した農場に対する抵当権設定（1851年8月8日の項）という事実のみである。なお，売手は移住していってしまうのであるから，残金取立てには面倒も多い。したがって，手形や抵当権は譲渡していってしまうことになる。ベンジャミンの場合，1851年9月末，ニュー・ヨーク市へ向う前と，翌年2

注(14)　期限付立替購入については，岡田泰男「ホームステッド法の効果」（『三田学会雑誌』65巻10号）40-41頁を参照されたい。

月上旬のアイオワ移住前に，ファーミントン近辺での貸借関係を清算し，移住に必要なお金をかきあつめているから，この時に手形や抵当権の処分をしたものと思われる。

次に西部の場合について見よう。兄弟がアイオワに着いたのは前記の如く1852年3月3日であるが，3月8日のベンジャミンの日記には，きわめて印象的なエピソードが記されている。彼等はその日，ホスキンズ (Mr. Hoskins) という者のところで馬を買おうとしたのであるが，ホスキンズは読み書きができないので，決して紙幣 (paper money) を受取ろうとはせず，結局，兄弟はクック・サージェントのところで，1パーセントの手数料を払って，正貨に両替してもらって馬を手に入れるのである。もちろん，その後の日記には，アイオワにおいても手形の利用がおこなわれている事実が示されているし，すべての取引が現金でおこなわれたとは考えられない。しかし，西部における現金不足という事態は，実際には，信用のおける銀行券が少ないことからも生じていたわけであり，総じて19世紀中葉の西部では，東部に比して金融・信用制度が未発達であったといえよう。

それ故，私有地の売買にあたっても，公有地の場合ほどには厳しくないにせよ，東部に比較すれば厳しい支払条件が課されたようである。ベンジャミンが購入した農場の代金は700ドルであったが，そのうち現金で222ドルを支払い，3ヵ月ほど後の7月1日に残金を支払う。また，全額支払いがすむまでは，土地は売手に対して抵当に入れる，というのが取引の内容であった。これらすべての手続きは，ダヴェンポートのクック・サージェント不動産の事務所でおこなわれているが，かかる取引にあたって，仲介する業者自身の信用度も支払条件に影響を与えたであろう。すなわち，信用のおける業者が仲介に立った場合ほど，売手としても寛大な条件を与え得たに違いない。そして，ベンジャミンの東部における取引のように，業者の仲介なしで売買がおこなわれた場合，果して信用が与えられたか否かは疑問である。

さて，ベンジャミンが東部から持参した移住資金は，とりあえず約800ドルであった。アイオワに到着後，まず300ドルをクック・サージェントで正貨に両替して，例のホスキンズから馬を購入（2頭，165ドル）したり，さらに荷車，馬具，農具，家財道具類を，ダヴェンポートで買入れた。農場代金のうち現金支払部分の222ドルは，やはりクック・サージェントで両替してもらったが，残額部分は持参した資金ではまかないきれず，6月に入ってからジョーが東部へ戻り，母親から500ドルを入手して支払いにあてている。上記の家畜，農具以外にも，農耕用の役牛を買入れたりする必要があったし，収穫があるまでの生活費も必要だったからである。ともあれ，農場を取得し，農具等を一応買いととのえた兄弟は，3月23日に，春小麦3エーカー，オート麦15エーカー，とうもろこし25エーカーを植えつけ，アイオワにおける農業生産を開始した。次節では，東部と西部における農業生産の変化を述べよう。

II　西部移住と農業生産

19世紀中葉の東部農業と西部農業の相違は，ベンジャミン・ギューの農場の場合，どのような形をとって現われたか。西部への移住によって，ギュー家の農業生産にはいかなる変化が生じたか。こうした点を，まず農作物から眺めてゆこう。表1はニュー・ヨーク州オンタリオ郡およびアイオワ州スコット郡のギュー農場において生産および販売された農作物の一覧表である。1847年から1851年までがニュー・ヨーク時代，1852年以降がアイオワ時代である。ニュー・ヨークの農場を売却したのは8月であったので，同年度の農作物は一応収穫まですまされたものが多かった。また，アイオワの農場購入は3月であり，前述の通り，すぐ生産を開始することができたので，結局，西部への移住にもかかわらず農業生産がとだえた年度というものはなかったわけである。表1において，二重丸の印がついている作物は，その年度に生産および販売の記録があるもの（ただし販売は翌

表1　ギュー農場の生産物

	ニュー・ヨーク					アイオワ			
年度	1847	1848	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
小麦	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
とうもろこし	◎	◎	◎	◎	◎	○	○		○
オート麦	○	◎	○	○	○	○	○	○	
そば	○	○	○	○	○	○	○		
じゃがいも	◎	◎	◎	○	○		○		
ライ麦			○	◎					
いんげん	○			○			○		
えんどう		○							
ビート		○							
西瓜		○					○		
きゅうり							○		
はぜとうもろこし							○		
牧草	○		○			○	○	○	
クローバ		○		○	○				
りんご		○		○			○	○	○
もも								○	
なし									○
さくらんぼう									○
ぶどう									○
豚			◎	◎			○	◎	
羊			◎		○	○	◎	◎	
羊毛	◎	◎	○	◎			○		

◎　生産および販売の記録があるもの
○　生産の記録があるもの

年になされる場合もある），ただの丸印がついているのは，生産の記録があるものである。なお，販売に関しては，日記への記入がもれている場合があるかもしれない。また，1854年度については，ベンジャミンが日記をつけなかった部分が多いので，表の記入は不完全である。

さて，表1を見て気付くことは，(1) ニュー・ヨーク時代の方が，多くの種類の作物を生産している。(2) アイオワへ移住した当初は，ニュー・ヨーク時代と同じような作物をつくろうとするが，やがて，ごく限られた種類の作物へ集中してゆく。(3) ニュー・ヨーク時代には，いろいろな作物を販売しているが，アイオワへ移住してからは，小麦と家畜以外は販売していない。以上の3点であろう。ニュー・ヨークにあったギュー農場では，小麦，とうもろこし，オート麦，そば，じゃがいも，牧草もしくはクローバは，毎年かならず生産されており，牧羊もおこなわれていた。そして，小麦，とうもろこし，じゃがいも，羊毛が主たる販売物であり，それらは，カナンダイガ，メンドン・ロックス (Mendon Locks)，パルマイラ (Palmyra) などで売却された。これらは，いずれも近くの町であり，その日のうちにパルマイラとメンドン・ロックスの両方をまわってくる（1850年8月14日）ということも可能であった。

アイオワへ移住したベンジャミンは，とりあえずニュー・ヨーク時代と同じパターンの農業生産をおこなうことを試みる。1852年は移住したばかりの年であったからともかく，1853年には，ニュー・ヨークでの主要作物はすべて生産し，野菜をつくり，りんごの苗木を購入して植え，羊と豚を飼い，いわば東部での生活を再現しようとしている。ところが1855年になると，農作物は小麦ととうもろこしだけになり，牧羊もやめてしまっている。こうした変化は，アイオワで販売されたものが小麦と豚・羊のみであるという事実と無関係ではあり得ない。1854年にりんごともも，1855年になし，さくらんぼ，ぶどうを植えているのも，販売の可能性を考えてのことであった。例えば1855年1月，ベンジャミンは4,000本のりんごの苗木を購入しており，これらが自家消費用でないことは明らかである。ベンジャミンが常に小麦を売却した町はダヴェンポートであったが，ここは彼の農場から一泊の旅で往復できる距離にあった。したがって，当時の西部の標準からすれば，ギュー農場はそう不便な場所にあったとはいえないが，ともあれ東部に比べて農産物の販売機会は限られていた。

単に農場における作物の種類だけを見ると，ニュー・ヨーク時代は多種多様であるので自給自足的色彩が濃く，アイオワでは特殊化してゆくので商品生産的な面が強いようにも感じられる。たしかに，東部には自給自足的な伝統がいつまでも残存しており，西部では商業化のスピードが早いといわれている。しかし，ギュー農場の場合に見られた農作物の変化や東西の対照を，自給的農業と商業的農業の相違としてとらえることはできないであろう。ベンジャミン・ギューは，ニュー・ヨークにおいてもアイオワにおいても商業的農業に従事していたのであり，ただ販売機会の差が，西部における特殊化をもたらしたのであった。もっとも，ニュー・ヨーク時代においても，最も利益

のあがる作物はあった筈であり，なぜそれに集中しなかったのかという疑問が生ずる。アイオワにおける特殊化が，販売機会の限定による消極的対応とすれば，ニュー・ヨークにおいては積極的な意味で特殊化が可能であったと考えられるからである。(15)

ベンジャミン・ギューは，決してお人好しで経済観念の薄い農民ではなかった。例えば，ニュー・ヨーク時代の次のような日記の記入を見てみよう。「夕方になって粉屋のマシューズ (Mathews) がやってきて，うちの小麦を8シル6 (8/6) で買おうといい，さんざんねばったが，われわれとしては相場がいくらか解るまでは売れないと断った。そこで，その日のうちにロックス (Locks) へ行き，サーストン (Thurston) に，土曜日までに運ぶという条件で，9シルで小麦を売った」(1850年8月6日)。8月上旬といえば，小麦の収穫が終ったばかりの頃であり，いわばその年の相場が立ちはじめる時期であるが，業者に対するベンジャミンの応接ぶりは見事なものである。彼が利にさとい農民であった以上，なぜ最も有利な作物に特殊化しなかったのかが，当然問題となる。

この疑問に対する解答として，第一に，ニュー・ヨークでは特に際立って有利な作物はなく，気候や価格の変化，病虫害などを考慮すれば，多角的な農業の方が安全かつ有利であったということが考えられる。しかし，第二に，たとえ有利な作物があっても，農場とくに耕地形態，耕作方法，それにともなう労働力の配分などの事情によって，特殊化がきわめて困難であったとも考え得る。もちろん一般的にいえば，第一の理由が存在したことは否定できない。けれどもギュー農場についてみると，第二の理由の方がより大きな制約条件となっているように思われる。それ故，以下においては，第二の点について考察してみたい。耕地の形態や耕作方法はギュー農場に個有の面もあるが，より広くニュー・ヨーク西部一帯に共通の面もあるのであって，第一の理由は一般的，第二の理由は個別的というわけではない。第一の点については後にふれることにしたい。

ニュー・ヨークのギュー農場は8ないし10の耕区 (lot) に分けられていた。8番目の畑までは第1耕区，第2耕区という風に番号がつけられ，ほかに果樹園，小果樹園と名付けられた畑があった。もっともこれは名前だけで，実際には小麦やとうもろこしが作付けられていた。表1に示した農作物がこれらの畑で作られていたわけであるが，具体的に，いかに農作業がおこなわれていたかを，1848年について調べてみよう。同年，農場での主な働き手はベンジャミンとジョーの2人であり，収穫期などに数日間，隣人が手伝いに雇われる程度であった。(16)

ニュー・ヨークにおいては，長い冬の間，農民は伐木や家の中での仕事に従事するのが常であり，

注(15) このような点について，一般的には Danhof, *Change in Agriculture* および Bogue, *From Prairie to Corn Belt* を見よ。なお，Mildred Throne, "Southern Iowa Agriculture, 1833-1890: The Progress from Subsistence to Commercial Corn-Belt Farming," *Agricultural History*, XXIII (1949), 124-130 が参考になる。アイオワ農業史一般については Earle D. Ross, *Iowa Agriculture: An Historical Survey* (Iowa City, 1951) がある。

(16) ニュー・ヨークの農場における一年間の農作業については，岡田泰男「ニュー・ヨーク農業の変遷」157-158頁にも記してあるが，これは酪農業を主とする農家のものである。また，同「ニュー・ヨーク農民の日記」の場合には，農業と同時に樽の製造にも従事しているので，一般農業をおこなっているギュー農場とは多少の相違がある。

実際に畑へ出ての農作業は4月に入るまで始まらない。1848年のギュー農場における最初の野良仕事は，4月3日に第4耕区に肥料を運ぶことであった。この畑には後にとうもろこしが植えられるが，ベンジャミンは例年とうもろこし畑に施肥をおこなっていた。肥料運びが終ると，4月8日に，第4耕区にあった柵を第1耕区と第3耕区との間に移した。第1耕区は，この年にじゃがいもや野菜を作る予定になっていたためである。4月10日に，同年はじめての耕起の準備がされ，第4，第5，第3の耕区の犂起しがおこなわれる。4月11日には「今年はじめてなので牛はまるで働かない」という状態であったが，じきになれて，はかが行くようになる。なお，役畜は2組の連畜である。4月15日には第5耕区にオート麦がまかれる。翌16日は日曜なので仕事は休むが，17日には第6耕区の犂起しが始まり，そこには20日と21日に牧草の種がまかれる。また，21日から25日にかけて第7耕区が耕起され，ここには26日にオート麦がまかれる。27日には，あらためて第1耕区の柵囲いがなされるが，ここは前記の通り野菜とじゃがいもの畑となるのである。

5月に入ると，3年間休閑地にしてあった果樹園耕区の犂耕がおこなわれる。3年ぶりに犂を入れるので容易ではないが，馬を1組と牛を1組つかい，優秀なケユガ犂（Cayuga plough）を利用した。この耕区は，6月と8月にも犂が入れられ，9月になって小麦がまかれることになる。果樹園耕区の1回目の耕起が終ると，第8耕区のとうもろこし畑の犂耕がおこなわれ，ローラーや馬鍬で土がならされた後，うねの区画がされ，とうもろこしが植付けられる。これが5月15日のことである。続いて，前月に肥料をやってあった第4耕区を耕起，整備して，とうもろこしを植える。5月下旬には第1耕区にじゃがいもが植えられ，野菜の種がまかれる。

6月には，とうもろこしを植えた第4，第8耕区の中耕除草が必要となる。これは上旬の数日間と，19日から24日までの仕事である。さらに，前記の果樹園耕区の耕起もおこなわれるが，これを「夏期休作地（summer fallow）の犂耕」と記している。当時の東部においては，地力回復のため，冬小麦を作る畑を夏の間は休作地としておいたのである。(17) 果樹園耕区は3年間も休ませておいたわけであるから，夏期休作地ともいえないが，ギュー農場では毎年，夏期の休作と犂耕がおこなわれていた。なお6月26日から乾草作りが始まり，手伝いの若者が雇われる。月末には，これと並行して，とうもろこし畑の再度の中耕除草，そば畑（第2もしくは第3耕区と思われる）の耕起もおこなわれる。なお，羊の毛を刈るのも例年6月の作業であった。

7月初旬には，上記の作業が重って多忙であり，4日の独立記念日も「そば畑を犂起して祝う」というありさまであった。5日にそばを種まきした後，とうもろこしの中耕除草を10日までおこなう。11日に放牧地のまわりの柵を修理し，13日から小麦の収穫が始まる。小麦は小果樹園耕区に作付けられていたものであり，収穫は機械ではなく手でおこなわれた。小麦収穫後，第6耕区の牧草

注(17) 夏期休作地については，Percy W. Bidwell and John I. Falconer, *History of Agriculture in the Northern United States, 1620-1860* (Washington, D. C., 1925), pp. 325-6.

を刈り，26日に乾草作りを終了する。7月28日から8月1日にかけて，新しい畑（new ground）の犂起しという記入があり，これは新たに開墾された11番目の耕区ということになろう。

8月2日から10日まで，第5，第7耕区のオート麦の刈取りがおこなわれ，束をつかね，納屋への運び入れが終るのは15日である。16日から22日までは果樹園耕区の最後の犂起しがされる。ここは8月1日に，いったん犂が入れられたが，土壌の状態から見て，いくぶん早めだったので後まわしとされたのである。十分な休養を与えられたこの耕区は，8月末にならされ，9月半ばに小麦がまかれることになる。

9月初旬には，小麦とオート麦の脱穀作業がなされる。続いて第4，第8耕区のとうもろこしの刈取り，小麦の種まきがある。とうもろこしの収穫には，必ずしも時間的制限はなく，小麦のように一定期間に収穫しなければならぬということはない。しかしギュー農場では9月末までに収穫をすませ，10月以降は皮むきにかかるのであった。とうもろこしに続いて，じゃがいも，そばの収穫があり，これらは10月にかかるが，そろそろ畑仕事は終りに近づく。10月10日はカナンダイガの共進会（Fair）の初日であったが，これは一つの区切りであって，それ以後は屋内での仕事が多くなる。

以上，ニュー・ヨークのギュー農場における農作業について見たが，さまざまな作物が別々の耕区につくられ，農作業が順序よく進行してゆく様子がうかがわれると思う。もう一度耕区毎にまとめると，第1耕区はじゃがいもと野菜，第2もしくは第3耕区の一方がそば畑で，他方は休作地，第4，第8耕区はとうもろこし，第5，第7耕区はオート麦，第6耕区は牧草が生産されている。また，果樹園および小果樹園耕区には小麦，さらに新しく開墾された部分にも小麦が作られていた。

ところで，個々の耕区の面積は正確には解らないが，種まきや収穫の際の記載によって，いずれも10エーカー程度であったことが推測される。これらの耕区は年々，作物にあわせて設定されるものではなく，いわば固定的なものであった。このことは，果樹園耕区というような名前のついている畑の存在や，作付の始まる以前に「昨年の春，第1耕区と第3耕区の間から移した柵を，第4耕区から元へ戻した」（4月8日）というような記入がなされていることによっても明らかである。そこで，何故このような固定的な耕区が存在するのかが問題となるが，これはかつての農場開墾の過程と関係があると考えられる。ギュー農場のある地域が，18世紀末から開けた地方であることは前述の通りであるが，本稿で扱っている19世紀中葉においては，最も古い農場でも建設が始まって50年程度にすぎない。東部の森林地帯における開墾が困難な作業であったことはいうまでもないが，家族労働力でおこなう場合の開墾速度は，年間10エーカー前後であったといわれる。農場建設は，開墾と農作業が平行して進行することになるわけであり，毎年新たな開墾部分が付け加えられ，耕地面積が増大してゆくことになる。(18)

注(18) 東部における開墾については，Danhof, *Change in Agriculture*, pp. 117-8. なお参考として，Martin L. Primach, "Land Clearing Under Nineteenth Century Techniques: Some Preliminary Calculations," *Journal of Economic History*, XXII (1962), 484-497.

ギュー農場の場合，すでに農場建設期は終了していたと考えてよいが，1848年においても新たな開墾部分が存在することは前に記した。さて，年間の開墾速度が10エーカー程度であったとすると，これは1耕区の面積にほぼ一致する。もちろん，毎年ひとつずつ耕区が増加してゆき，その順に番号が付けられたかどうかは解らないが，ともあれギュー農場においては，ある年度に開墾された部分が1耕区をなしていたと考えても良いであろう。ただ，こうした耕区が，なぜ合併されてしまわずに，いわば独立した形で存続しているのかという点が疑問に残る。これには，当時の技術水準と自然の地形どいう2つの要因が関係している。

新たに開墾された畑は地力が豊かなので，とうもろこしなり小麦なりが作られるのが常であった。以前からの古い畑では，小麦を作る前に夏期休作をおこなうとか，小麦を何回か続けた後では牧草地にするとかいう手段で，地力の回復がはかられる。したがって，せっかく穀物生産の良くできる新しい畑を，地力の劣る古い畑と一緒にしてしまうことは不利であった。他方，新しく開墾した畑には欠点もあった。それは切株などが残っていて，耕作がやりにくく，犂をこわしたりする恐れもあったことである。当時の開墾技術では，大きな切株までは引き抜かず，そのままにして朽ちるのを待つのが普通であったし，切り倒すことが困難な木は，皮をむいて，やはり朽ちるのを待った。それ故，森林の名残りがすっかりなくなった古い畑と，開墾したばかりの土地をひとまとめにして耕作することは，困難でもあり非能率的でもあった。

さらに地形の問題もあった。ニュー・ヨークのジェネシー地方は，東部としては平坦な土地であったが，西部の草原地帯に比較すれば，はるかに起伏に富んでいた。したがって，ひとつの耕区と他の耕区とを併合してしまうことが，実際問題として不可能な場合もあったに違いない。例えば，南向きの傾斜地と排水の悪い窪地が地続きになっていたとしても，これらは別々の耕区にして利用した方が合理的である。こうした地形は東部については頻繁に見受けられるのであって，農業機械の利用を不可能にするほどではないが，西部に比べれば非効率的な利用しかできない場合も多い。いずれにせよ，ギュー農場がいくつもの耕区に分割されていたのは，個々の耕区が，地形的にも農作業に好都合なまとまりをなしていたからに相違ない。(19)

さて，以上のような理由で，農場全体が細分化されているのに応じて，労働力の配分が適切におこなわれる必要がある。種まき，中耕除草，収穫など，農作業にはすべて自然の制約があるから，ある時期に忙しすぎて手が足りなかったり，別の時期にする仕事がなかったりしないよう，十分な配慮が必要となる。ギュー農場において，さまざまな農作業が，まさに整然と進行してゆくありさまは，すでに見た通りである。ここで，とくに注意すべきことは，これら農作業の大部分が，人手のかかる旧式な技術によっていることである。収穫には大鎌 (cradle) が使われ，脱穀には穀竿 (flail)

注(19) 地形および土壌については，とりあえず次が参考になる。Marlin G. Cline, *Soils and Soil Associations of New York* (Ithaca, 1963).

が使われた。中耕機 (cultivator) や馬鍬 (harrow)，土ならし機 (leveler) はすべて自家製であり，除草には鍬 (hoe) も使われた。もちろん，他人から脱穀機を借りたり，小麦の種まき機 (drill) を賃借したという記入もあるが，全体としての技術水準は低かった。このことは，小麦をつくるための夏期休作という点についてもいえる。ベンジャミンは施肥やクローバの栽培をおこなっていたが，本格的な輪作を実行していたわけではなかった。それ故，何回も犂耕が必要な夏期休作地や，長期の休閑地をおかねばならなかったのである。

細分化された耕地，技術水準の低さ，多大な労働量の必要，農作物の種類の多さ，これら四者は密接に関連しあい，ある意味では悪循環をなしていた。例えば小麦に特殊化しようとしても，まず耕区のやりくりが問題となる。初年度に関していえば，他の作物をつくる筈であった耕区に小麦を作付けするためには，夏期休作が必要となって，そのシーズンの生産物は得られなくなる。小麦は秋まきであり，収穫が得られるのは翌年になるからである。しかも，いったん小麦畑に転換してしまった後は，夏期休作のみならず，ある年限がくれば長期の休閑が必要となり，農場全体として耕地面積を増加させねばならなくなる。さらに，耕区が細分化されていて農業機械の採用が不利であるとすれば，収穫時に人手不足になるのは目に見えている。こうした事情がある限り，小麦への特殊化は，たとえ市場的には有利であっても不可能に近いといえるであろう。

ところで，われわれの問題は，ニュー・ヨーク時代のギュー農場において，なぜ特殊化がおこなわれなかったのか，ということであった。しかし，以上のように見てくると，問題は単に特殊化しない，もしくはできないということはではなく，もう少し根が深いことが解る。すなわち，ギュー農場はいわば有機体であって，そこでは農作物の種類だけを変化させるなどということができない。一部分の変化は農場全体におよぶわけであって，逆にいえば，農作物にかぎらず，技術や労働力の配置を変化させることにも困難が多い。極端ないい方をすれば，特殊化できないのみならず，変化できないのであって，新しい農法や農機具の採用にも抵抗が多かったと思われる。ベンジャミンは経済観念に恵まれていたし，保守的でもなかった。このことはアイオワ移住後の状態を見ればわかる。ニュー・ヨーク時代のベンジャミンが旧態依然たる農業に甘んじていたのは，いわば均衡状態にある農業生産を維持せざるを得なかったためであった。ギュー農場の場合，西部移住のみが変化を可能ならしめたといってよい。(20)

アイオワへ移住したベンジャミンとジョーが，とりあえずニュー・ヨークでの農業生産の型を再現しようとしたことは，すでに述べた。したがって，西部移住が変化を可能にしたとはいっても，ベンジャミンが変化を目的としてアイオワへ移ったとはいえないであろう。しかし，たとえ東部と同じパターンの農業をくりかえそうとしても，森林地帯からプレーリーへという環境の変化によっ

注(20) 東部の農場において，たとえば新しい鋳鉄製の犂を採用する際に困難があったことについては，Danhof, *Change in Agriculture*, p. 189.

て，必然的に異なる点が生ずる。例えばニュー・ヨークでは冬小麦が作られていたが，アイオワでは春小麦が作られるようになった。[21] そのため，秋の種まき作業が4月に移る。また，土地の肥沃さという点から，アイオワでは夏期休作とそれに伴う犂耕が不要となり，施肥もおこなわれなくなる。畑から石ころを除去する作業が不要となったのも，アイオワへ移住したおかげであった。もっとも東部では木材が豊富であったため柵木に不自由しなかったが，アイオワではオセイジ・オレンジ (osage orange) や，はりえんじゅ (locust) の垣が必要となった。乾草作りの時期も，ニュー・ヨークでの6～7月から8～9月へずれているし，作物の取入れにも，いくぶんのずれがある。また，ニュー・ヨーク時代の楽しみであった3月のかえで糖 (maple sugar) 作りは，アイオワでは味わえなくなってしまった。

さて，以上の変化は，ギュー農場における日々の農作業に当然大きな影響を与える。例えば，ニュー・ヨーク時代には犂耕がしばしば必要であったため，年間50日以上もこれにあてられていた。詳しい表は次節に示すが，アイオワへ移ってからは夏期の犂耕がなくなり，年間20日程度ですむようになった。乾草作りや収穫期のずれは，年間全体としての労働力配分に変化をもたらし，かえで糖作りがなくなったり，林での伐木が少なくなるため，冬期の仕事も変ってくる。しかし，これらは東部での農業生産をくりかえそうとしても，プレーリーという環境のために生ぜざるを得ぬ変化であって，ベンジャミンが進んで求めたわけではない。

それと比較すると，表1のアイオワ時代における農作物の変化は，より積極的な意義を有している。先に，アイオワにおける特殊化は販売機会が限定されたための消極的対応であると書いた。しかし，ニュー・ヨーク時代のギュー農場の状態を考えてみれば，市場条件の変化に即応して特殊化できることは，決して消極的対応とはいえなくなる。とくに果樹栽培の導入などは，極めて積極的といってよい。ニュー・ヨークからアイオワへの移住によって，自給的農業から商業的農業への変化がおこなわれたのでないことは，すでに記した通りであって訂正の必要はない。ただ，同じ商業的農業とはいっても，農場経営者の意志によって生産のパターンを変更し得るか否かという点で，ニュー・ヨークとアイオワのギュー農場は大きく異なっている。西部への移住は，東部においてギュー農場が縛られていた悪循環を断ち切ったのであった。

西部のプレーリーにおいては，ニュー・ヨークのように細分化された耕地は存続する必要がない。農場内を作物によって区分けすることはあっても，ある耕区と他の耕区とを併合する上での地形的障害などは，まず存在しないといって良い。ニュー・ヨークの場合，年間10エーカーという開墾速度が小さな耕区を形成する要因になったのではないか，と記した。アイオワのプレーリーでは，開墾の速度は前にもふれたように1日2エーカー程度であり，たとえ開拓民が自力でおこなっても，東部森林地帯の1年分を10日程度で開墾し得た。しかもプレーリーには切株の問題はなく，古い畑

注(21)　当時のアイオワで春小麦が作られた事情については，Bogue, *From Prairie to Corn Belt*, p. 127.

と新しい畑とをつなげても一様に耕作することができた。また，肥沃度の問題にしても，19世紀中葉の段階では，古い畑でも地力減退などということはあり得なかった。

かかる耕地の状態は，農業機械の導入にうってつけといってよい。ベンジャミンは1853年，すでにオート麦を収穫機によって刈り取っている（8月16日）。これは自身で購入したものではないが，1855年になり，生産を小麦ととうもろこしに集中させると，早速マコーミック (McCormick) とも連絡をとり，結局アトキンズ収穫機 (Atkins Reaper) を購入している（6月23日，7月2日）。この収穫機の価格は180ドルであったが，ベンジャミンだけでは資金がなく，数名の者から出資してもらって購入したものであった。[22] そして，7月13日から8月3日までの間に，6農場分の小麦を順番に収穫している。「ジェリー (Jerry) の小麦畑で収穫機を使用し始めた。収穫機の具合は大変よい」という7月13日の記述には，ベンジャミンの喜びの気持があらわれている。草刈りには大鎌 (scythe) もまだ使われていたが，草刈り機 (mower) も利用された（1855年8月27—30日）。

以上の如き農業機械の採用が，ギュー農場における必要労働量を減少せしめることはいうまでもなく，この面での余裕が，耕作面積の増大や，果樹栽培の導入を可能ならしめたであろうことは想像に難くない。また，一方では，畑作物の種類を少数にしぼってゆく方が，労働力や機械の利用をより効率的ならしめることは当然である。表1に示されたアイオワにおける特殊化の傾向は，かかる背景の下に生じたのであって，西部移住がギュー農場にもたらした変化を集約的に表わすものであった。（つづく）

（経済学部助教授）

注(22)　当時のアイオワで最も人気があったのはマニイ (Manny) 収穫機であり，次いで，マコーミックとアトキンズの収穫機が好まれたと，ロスは述べている。Ross, *Iowa Agriculture*, p. 44.